

持続可能な社会へ人材育成



八戸工業大の学科再編で2018年4月に誕生した「生命環境科学科」。若年層の理系離れが懸念される中で、地域課題の解決などを目標に掲げて「生命と環境の科学」に取り組んでいる。研究室では現在、どのような研究が進んでいるのだろうか。長谷川明学長に同科開設の狙いと研究内容、地域産業との関わりなどを聞いた。

(聞き手・今井崇雄)

長谷川学長インタビュー

18年にそれまでのバイオ環境工学科を改編する形で、生命環境科学科をスタートさせた。狙いは、非常に恵まれた環境にある。さまざまな変化に生命を含む環境の話が世界的に課題となっていて、形成するにはどうすれば



生命環境科学科の研究内容などを語る長谷川明学長＝9月上旬、八戸工業大

地元産業支援が使命

いいかを考えるのに格好の場所だ。

テーマの一つは地球温暖化であり、国連がSDGs(持続可能な発展)のために目標を設定する

今のタイミングで、私たちの大学もそれに応える人材を育てるのが重要だと考える。そのバックボーンとなるのが、生物学と化学を中心とした学習であり、生命環境科学科では、そういう面で社会に貢献する人材を育てたい。

1 学科開設によって研究・教育面ではどのような変化があったか。

海洋や森林などに関するさまざまな調査活動が始まったところだ。新しい教員も3人迎え、生物と化学、環境の3分野を結び付ける人材を増やした。

1人は乳酸菌や発酵食

はせがわ・あきら 専門は構造工学・橋梁(きょうりょう)工学。1976年に東北大学院の修士課程を修了し、八戸工業大助手に。講師、助教授を経て95年に教授に就任。2016年から現職。弘前市出身。69歳。

品物の専門家、青森ならつなぐは深い。具体的には、私たちに「教育」結び付けた研究をしても「研究」という二つの役割があると考えている。

く研究をしており、環境問題を決する糸口となつてほしい。3人目はキノコに代表される極地の菌類が専門で、北国の菌類をはじめとする環境について広く研究を展開していただけるだろう。

1 近年は若年層の理系離れが懸念されている。理科に接する機会が少

ないのが背景のように感じるが、環境というテーマには関心が高いと受け止めている。例えばマイクロプラスチックなど海洋環境の他、普段の生活の中では、ごみや下水の話などはそうだろう。子どもたちは植物や動物など生物への興味も高いので、こうした部分を糸口として理系分野に進む人が増えるのを期待している。

1 地元産業との関わりをどう捉えているか。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。

八工大は元をたどれば、漁業無線を使える人材を育てたいという漁業者の思いから始まっております。元々、地元産業との

地域産業の振興や課題解決とも関わる同科の研究。10月1日から隔週火曜日に「ラボリポート」を掲載し、各教員の研究内容などを紹介してもらいます。